

それではガラテヤ人への手紙 2 章をお開き頂きたいと思います。1 節からまず読み始めます。『それから十四年たって、私は、バルナバといっしょに、テトスも連れて、再びエルサレムに上りました。』パウロが復活のイエス・キリストに出会って、目からウロコの体験をして救われたのは、回心したのは、クリスチャンになったのは、AD35 年頃とされており、その後先週も見ましたようにパウロはアラビヤの砂漠へ退いて、そこで 3 年間復活の主と共に水入らずの時を過ごします。岩の上にも 3 年なんていう言葉がありますけれども、パウロは砂漠で、荒野でイエス・キリストとマンツーマンで特訓を受けながらイエスの召して下さったその働きに相應しい者となれるように、その尊い時間を過ごしたわけです。その後パウロはエルサレムに向かって、15 日間使徒の頭かしらとされているペテロとも時間を過ごしました。これも先週見た内容です。1 章に書かれております。他にも、主の兄弟と呼ばれるヤコブとも時間を過ごしました。主の兄弟と言うのは、イエス・キリストの義理の弟のことです。ヨセフとマリヤとの間に生まれたのがヤコブ、そしてその他にも兄弟が居たわけです。ユダとか居たわけですが。イエスは父なる神をその実父としております。養父がヨセフ、大工のヨセフであります。そして、他の使徒たちとはパウロは面会しなかったと言っております。これはパウロが歓迎されなかったということでもあります。元々教会を激しく迫害した人物です。パウロが実際にステパノという新約聖書の初代教会の最初の殉教者となった、そのステパノの殉教にも深く関わり、そして実際に死に追いやったその張本人でもありましたので、恐れられてもいたわけです。その後パウロはシリア、キリキヤ地方という所に行きました。それは実はパウロの生まれ育ったホームタウンのあるところ、キリキヤというローマの属州の首都がタルソという所で、パウロはそのタルソで生まれ育ったわけです。そこでずっと、元々彼は天幕職人でもありましたので、ひっそりと暮らしたわけです。気が付いたらおよそ 10 年という月日が過ぎておりました。それらを全てひっくるめて 14 年経ったわけです。その 14 年経った頃にシリア州のアンテオケという所で、当時ローマ帝国の属州でありましたけれども非常に大きな町で帝国の第 3 の都市と言われるほど栄えていた所です。でも、そこでイエス・キリストを信じる者たちが突然多く起こされたわけです。リバイバルのような現象が起きたわけです。多くの異邦人たち、また異邦社会で暮らしているユダヤ人たち。ギリシャ語を話すユダヤ人という人たち。特別に彼らのことを新約聖書では『ギリシャ語を話すユダヤ人』というふうに呼ばれています。使徒の働きの中に多く出てきます。また“ヘレニスト”とも言います。ヘレニズムのヘレニスト、ヘレニストユダヤ人とも言います。そんな人たちが大勢大挙して一遍に救われたという現象が起きました。そして、その現象をエルサレム教会の人たちが聞いて、エルサレム教会というのが初代教会です。全世界の教会の母教会と言えるところ、そこが本拠地となっていたわけですが、そこからバルナバという人を代表で遣わして「様子を見てくるように。そしてそこで救われた人たちを励ましたり、指導するように。」バルナバという人が遣わされたわけですが、バルナバはそれをアンテオケという所に来てみたら、自分 1 人ではとても手に負えないぐらい神様は大いなることを為さっている。そしてそこで救われている人たちに最も効果的に仕えることの出来る人物が彼の思いの中に与えられたわけです。その人物こそパウロという人でありました。そして実際にバルナバはタルソに赴いて、そしてそこで密かに、静かに天幕職人として暮らしていたそのサウロに声をかけて（パウロと後に改名しますが）一緒に来て欲しいと。「アンテオケに一緒に来て欲しい。そこで共に主のために働こうじゃないか。」ということで、バルナバはサウロを伴ってアンテオケに赴き、そこでさらに大いなる働きが成されたということです。詳しい事は使徒の働きの 11:19~26 に記録されております。そのアンテオケという所で初めてイエス・キリストを信じる者たちが、その弟子たちが“キリスト者”、“クリスチャン”、ギリシャ語で“クリスティアノス”と呼ばれるようになったとあります。英語の“christian”です。それまでは“クリスチャン”と呼ばれたことはなかったわけです。“クリスチャン”という呼び名は、アンテオケで初めて使われるようになりました。意味は「キリストの事ばかり、朝から晩まで口にしている。この連中の考えていることは、いつもキリストのこと。だからこいつらはキリストキチガイ、キリスト馬鹿。」それが“クリスティアノス”という言葉の本来の意味でありました。ですからこれは擲擻やうゆする、見下す、軽蔑する、蔑称だったということです。聞

こえは決して良くなかったわけです。キリストキチガイ、キリスト馬鹿、というのが“クリスチャン”という本来の呼び名でありました。でもそのように呼ばれることを彼らはむしろ喜び、誇りとすらしていたわけです。ですから後にこの“クリスティアノス”、クリスチャンという言葉が、信者の間でも使われるようになったわけです。これは名誉ある呼び名、光栄であるということです。

使徒の働き 13 章になりますと、そのアンテオケが今度は世界宣教の本拠地となっていきます。バルナバとパウロが、パウロが、小アジアという今日のトルコの地域の町々に宣教師としてそこから派遣されるようになります。その際にガラテヤも彼らは訪問しているわけです。そして、それらの宣教はパウロの第一回宣教旅行、第一次伝道旅行などとも言われますが、そこからちょうど戻って、またアンテオケの宣教センターに戻って来たわけです。それが使徒の働き 14 章に記録されています。そして、続く使徒の働き 15 章において大きな問題が勃発するわけです。それがこのガラテヤの 2 章の背景ともなっております。使徒の働き 15:1~2 を今お読みしたいと思います。『¹ さて、ある人々がユダヤから下って来て（どこに下って来たかと言うと、アンテオケに下って来て。これは 14 章からの続きです。）、兄弟たちに（クリスチャンたちに）、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない。」と教えていた。（今日で言えば、洗礼を受けなければ救われない、みたいな律法主義の、行為義認の、ほかの福音と呼ばれるような教えです。先週見ました。）² そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバと、その仲間のうちの幾人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。』エルサレムに上ることになった、とあります。ガラテヤ 2 章 1 節のところにも『それから十四年たって、私は、バルナバといっしょに、テトスも連れて、再びエルサレムに上りました。』とあります。そこで教会史において最初の教会会議というのが行われます。公会議とも言います。エルサレム公会議というものが初めて開かれたわけです。最初の教会会議の議題というのは、まさに『人は信じるだけで救われるか。それとも信じるだけでは不十分なのか。信仰義認か、行為義認か。恵みによる救いなのか、それとも律法の行いによる救いなのか。』その救いの根幹に関わる重要な議題が、ここで議論的となったわけであります。そして、パウロはバルナバとともに、そして自分の若い弟子、子分とも言えるテトスを連れて行ったわけです。テトスという人物はガラテヤ 2 章 3 節を見て頂くと、ギリシャ人だったとあります。異邦人です。異邦人なのに救われたわけです。パウロを通して救われた宣教の実、それがテトスです。私もスウェーデンから来た宣教師の実であります。宣教師を通して救われた人たちがこの中にもあろうかと思いますが、そのような宣教の実、それがテトスであります。

そして、テキストの 2 節に今度は目を移して頂きたいと思います。『それは啓示によって上ったのです。そして、異邦人の間で私の宣べている福音を、人々の前に示し、おもだった人々には個人的にそうしました。それは、私が力を尽くして走っていること、またすでに走ったことが、むだにならないためでした。』啓示によって、とあります。1 章 12 節というところにもパウロは“啓示”という言葉を使っております。

『¹² 私はそれを（それというのが、パウロが受けた福音の啓示であります。それを）人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。』パウロの使徒的権威を疑う者たち、パウロの伝える福音のメッセージの内容を否定するような人たちがあつたわけです。また同時にパウロは、エルサレムの教会の指導者ペテロやヤコブやヨハネといったそういう使徒たちにただ教えを受けただけの下っ端であると。ペテロ、ヤコブ、ヨハネと肩を並べるような使徒の権威はパウロにはないと。そのようにパウロを馬鹿にする人たち、パウロの権威を否定する人たち、パウロの宣教活動が有効でないと思なす者たちがあつたわけです。そういう反論に対してパウロが応答したのが、このガラテヤ人への手紙であつたわけですが、あくまでパウロはイエス・キリストから直接啓示を受けたと。アラビヤという所では 3 年間イエスから直接手ほどきを受けたわけです。ちょうど弟子たちが、12 使徒たちが 3 年半の間イエスと共に寝食をしたように、パウロもまたマンツーマンで、12 弟子よりもむしろある意味で緊密な時間を主と共に過ごしたわけです。1 対 1 です。12 対 1 ではなくて、1 対 1 の時間を過ごしたわけです。パウロはそのような特別な啓示をイエスから直接受けていた人物です。そしてここでも、その啓示によってエルサレムに上つたとあります。自分の考えではないということです。自分の人間的な思いや、自分の計画から出た

ことではない。人から命令されたり、強要されたことでもないということです。神からの啓示を受けたら、私たちはそれに従うべきです。そしてその啓示によって私たちは自分の思いを、また自分の考えを時には否定することも求められるかもしれませんし、また自分のプライドを捨て去らなければならないこともあるわけです。やりたくないということ、出来たら避けたいということも、神の啓示においては私たちは逃げてはならないということです。たとえそれがハードルが高いことでも、難しいことでも、トラブルが目に見えるようなことであっても、神から啓示を受けたならば私たちはそれに応答すべきですし、それに従わなければなりません。パウロにとってこの啓示というのは、そんなに易しいものではなかったと思われま。そしてその啓示によってパウロはエルサレムに上ったわけですが、そこで主立った人たちと会いました。主立った人たちというのが、エルサレム教会の指導者たち、重鎮という人たち。彼らと協議をしたということですが、実際に英語の聖書では「コミュニケーション」"communicate"したという言葉が使われております。主立った人たちとコミュニケーションしたと、『個人的にそうしました。』と新改訳聖書はなっておりますけれども、コミュニケーションした、会話を交わしたということです、協議をしたということです。その目的というのは結論から言いますと、教会の中の分裂を防ぐため、分裂を避けるため、また教会の一致をもたらすためといったものでした。パウロたちの異邦人宣教に関していろんなあらぬ噂が流布していたわけです。誤解もあったわけです。偏見もあったわけです。いろんな行き違い、履き違い、間違っった印象というものが一人歩きしていたわけです。それらを全て協議することによって、コミュニケーションを取ることで解消していく、解決していくという目的でありました。このように教会のリーダーたちと協議を図って、そして意思の疎通を図るということは非常に大事なことであります。皆バラバラに、思い思いにイエスの名によって好きなことをやるのではありません。教会は常に一致を目指していかなければいけません。そこにも誤解が生じたならば、いろんな行き違いや履き違い、偏見、無理解、誤解というものが生じたならば、しっかりとコミュニケーションする必要があります。コミュニケーションを取る必要があります。また報告の義務があるわけです。ここでパウロはエルサレムの主立った人たち、指導者たちと意思の疎通を図って、そしてパウロのやっていることに関して改めて承認を受けようとしたわけです。確認を取ろうとしたわけです。また追認をもらおうとしたわけです。これによって不要なトラブルが避けられるということです。ゴシップを、噂話を断つということも叶うわけです。このことは非常に大事なことです。皆さんにも伝えておきたいと思。私たちがいろんな働きに召されていきますけれども、教会では好き勝手に働くのではないということを知って下さい。必ずしも上の許可がなければ何も出来ないという事ではありません。そうではなくて、常にコミュニケーションして、常に協議して、常に確認を取って、そして行き違いがないように、履き違いがないように、偏見や誤解が生じないように。そのような承認を受けていくということは非常に大事なことであります。ですから、良かれと思ってとか、いろんな強い思い込みでとか、パウロは幸い間違っった事はしてありませんでしたけれども、でも私たちは間違っすることもありますが、ですから常に教会の指導者ともコミュニケーション、協議もしながら、意思の疎通も図りながら、その働きが間違いなく主の御心にかなうものである、それが間違いなく主の栄光を現わすものである。そして、それが間違いなく教会を建て上げるものである。神に喜ばれるものかどうか、全てそうやってコミュニケーションが非常に重要な役割を果たすということを感じて頂きたいと思。承認とか、確認、追認。そうしたことが不要なトラブルを避けることに繋がるということです。くだらない、つまらないゴシップ、それを断つことも出来ます。あの人たちがやっていることは本当に正しいのかどうか。あんなことをやっているけれども、あれでいいのかどうかとか。でも、それが教会の指導者の承認を受けているものならば、もう誰も文句は言えないわけです。もうそんなゴシップを断つことが出来ます。そんなつまらないところから教会の間に亀裂が生じてしまうわけです。分裂をもたらすということですから、私たちもこれを啓示として、主からの知恵としてしっかりと適用して、私たちもこの小さな教会の中にもつまらない分裂が起こらないように、つまらないゴシップが一人歩きしないように注意をしていきたいところであります。

そして**2節**のところパウロが“走る”という言葉を使っております。これはパウロが好んで用いたメタファー（比喩）というものです。**ガラテヤ 5章 7節**にも使われております。『あなたがたはよく走っていたのに、だれがあなたがたを妨げて、真理に従わなくさせたのですか。』ガラテヤのクリスチャンたちはよく走っていたと。その走り妨げる妨害

者たちが密かにガラテヤの教会に忍び込んで来たというのが、**2章**の内容でもあります。

また、ピリピ**2章16節**にも(勿論これもパウロの手紙です。)“走る”という言葉が使われております。ただし新改訳では、直訳はされておられません。『いのちのこぼをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦勞したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることが出来ます。』努力したこと、というところに“走る”という言葉が使われています。ですからこの“走る”というのは、意識すれば「努力」ということです。

また、**第一コリント9章24節**と**26節**というところにも、パウロは“走る”という言葉を用いて信仰生活に当てて使っております。決勝点を目指す走りをしているんだと。つまり、決勝点がどこにあるか分からない、目的が、目標がどこにあるか分からないような無駄な走りは、私はしないんだ、ということを宣言しております。そして、そのような走りをしてはならないということも、コリントのクリスチャンたちに告げております。無駄な走りはしない。私たちはしっかりとゴールを目指して、目的意識を持って走る者であります。がむしゃらに努力するものではありません。正しい方向へ向かうべきだということです。でも、その走りを妨げる者たち、間違ったゴールへ誘うような妨害者が、ガラテヤの教会に現れたということでもあります。だらだらと歩いている場合ではありません。私たちも走るべきです。立ち止まっている場合ではありません。つまづいて倒れたままではあります。また逆方向に、後ろ向きに歩む、そんな愚かなこととしてはいけません。パウロと同じように、またガラテヤのクリスチャンたちと同じように私たちが目標を目指して、決勝点を目指して走り続けなければいけません。そして私たちの目標、決勝点とは、一言で言うならばイエス・キリストであります。私たちはイエス・キリストへ向かって走っています。それ以外のゴールを目指してはいけません。イエス・キリスト以外を目指しているならば、その走りは間違っているということです。イエス・キリストがゴールならば、私たちはつまづいても倒れても何度でも立ち上がれるはずであります。このゴールを間違ったら「もう私たちはダメだ。出来ない、もう無理。そんなゴール、とても到達出来ない。」と言ってしまうかもしれませんが、でもイエス・キリストが私たちのゴールです。そして、そのゴールを定めたのは他ならぬ神様ですから、神様が定めたわけですから、私たちが勝手に定めたわけではないですから、それは神には出来ることです。私たちをして、神はそれをして下さいます。そのことが**ピリピ1章6節**にも書いてあります。『あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。』ちゃんとゴールまで到達出来るということです。

話を戻しますけれども、ガラテヤ**2章3～4節**を今度はお読みします。『³しかし、私といっしょにいたテトスさえ、ギリシヤ人であったのに、割礼を強いられませんでした。⁴ 実は、忍び込んだにせ兄弟たちがいたので、強いられる恐れがあったのです。彼らは私たちが奴隷に引き落とそうとして、キリスト・イエスにあって私たちの持つ自由をうかがうために忍び込んでいたのです。』ギリシヤ人のテトスに対して割礼を強いるような者たち、また他にもアンテオケで救われた所謂ヘレニストと呼ばれる人たち、ギリシヤ語を話すユダヤ人たちに対して、特に「あなたたちは律法を守らなければいけない。割礼を受けなければ救われない。ユダヤ人にならなければ救われないんだ。」と、若しくは「割礼を受けなければ霊的になれない。敬虔なクリスチャンになれない。神からの祝福を受けられない。」みたいなことを教えていたわけです。そんな彼らのことを、「忍び込んできた偽兄弟たち」とパウロは呼んでいます。また、この同じく**2章**のところには、「割礼派の人々」ともパウロは呼んでいます。また**1章**の方では**7節**で「かき乱す者たち」とパウロは彼らと呼んでいますし、**1章8節**、**9節**では「彼らのようなものはのろわれるべき者たちである」ともパウロは言っております。ですから、この割礼を強いる偽兄弟、偽兄弟ということは偽クリスチャンということです。彼らは救われていない偽者ということです。名ばかりのクリスチャンということです。そういう人たちが教会の中に実際に忍び込んで来るということも覚えたいと思います。「まさか、あの人が。まさか、この人が。あの人は役員で、教会の会計までやっている。」イスカリオテのユダのことを覚えて下さい。彼は誰からも認められて、そして一目置かれていた使徒であったわけです。他の人たちは、ユダがまさか裏切るとは夢にも思っていなかったほど、使徒たちからの信頼も厚かったわけです。会計係をするぐらいですから、実に立派な使徒、クリスチャンというふうに使われていたわけです。

でも偽兄弟、偽クリスチャンというのが存在する。そして偽働き人、偽牧師、偽宣教師、偽伝道者、そういう人たちが実際に存在するということが聖書の中に記されていますから、私たちは予期して、覚悟して、一一もってそういう人たちが現れたからといってショックを受けてもいけませんし、取り乱してもなりません。彼らは律法主義者でもあり、またユダヤ教主義者と言った方が正確かもしれませんが、「割礼を受けなければ救われない。」という神の救いを根底から覆して、そしてその恵みを台無しにしてしまうような恐ろしい教を説く者たちでした。そんな彼らのことをパウロは「絶対に許さない。」と、激しい口調で彼らのことを糾弾しているわけです。断罪しているわけであります。それが「ほかの福音」と先週見た呼び名です。「ほかの福音」の“ほかの”というのは、「全く質の異なる、異質の」福音です。異なる種類の福音ということです。それは、のろわれるべき教え、悪魔的な教えです。「信仰プラスアルファ、恵みプラスアルファ。信じるだけでは救われない。聖書だけでは不十分。」それは完全に異端の教えであるということです。

そして、今**使徒の働き 15 章**のエルサレムの公会議の記述のところに目を留めて頂きたいと思います。**使徒の働き 15 章 24 節**に彼らのことが言及されています。『**私たちの中のある者たちが**(私たちの中の、と言っているのは、エルサレムの教会の中のある者たちは)、**私たちからは**(ペテロ、ヤコブ、ヨハネといったエルサレムの教会の指導者たちからは)**何も指示を受けていないのに、いろいろなことを言ってあなたがたを動揺させ**(あなたがたというのは、前節の 23 節にあるアンテオケ、シリア、キリキヤにいる異邦人の兄弟たちです。そのあなたがたを動揺させ)、**あなたがたの心を乱したことを聞きました。**』恵みによってのみ救われる。信じるその信仰を通してのみ義と認められる。そのシンプルな福音をすり替えて、行いによらなければ、割礼を受けなければ救われない、というような、再び律法主義に引き戻そうとするような、キリストにある自由を真っ向から否定して律法による不自由を強いるような、そんな教を説く者たちが現れたんだということを言っております。キリストにある自由を否定する者は、律法による不自由を強いる者たち。「あれをしなければいけない。あれをしてはいけない。」束縛をもたらす者たちです。折角イエス・キリストによってそうしたものから解放されたのに、再び律法主義に、再び人間の作った宗教、行いによる救い、行為義認の宗教に引き戻そうとする異端的な教え、非聖書的な教を彼らはもたらしたわけです。

2 章 5 節。そんな彼らに対してパウロはこんなことを言っています。『**私たちは彼らに一時も譲歩しませんでした。それは福音の真理があなたがたの間で常に保たれるためです。**』福音の真理が常に保たれるように、パウロは一時も譲歩しなかった。一瞬たりとも妥協しなかったということです。この**福音の真理**という言葉は、この**2 章**の中では**14 節**にも繰り返し使われております。強調されているわけです。パウロはエルサレムに赴いて、指導者たちとどんなことでも語り合ったわけです。誰とでも話し合いに応じたわけですがけれども、しかしこの**福音の真理**については誰が何と言おうとも一切譲歩するつもりはない、一切の妥協はしないということを、力強く宣言しております。キリストにあってはユダヤ人もギリシャ人も異邦人も、何の違いもない、何の差別もない、何の差異もないのだと。それが福音であると。

ガラテヤ 3 章 22 節のところには『**しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。**』すべての人はユダヤ人であろうと異邦人であろうと罪人であって、罪人には当然救い主イエス・キリストが必要なわけです。そのイエス・キリストに対する信仰によって救いは与えられると。そして、その救いというものは私たち異邦人にも及んだわけであります。別にユダヤ人の規定を守らなくても、誰でもイエス・キリストを信じるならば救われる。

そしてこの**ガラテヤの 3 章 28 節**のところには『**ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。**』ユダヤ人、異邦人。そのような区別はないということです。それが教会という共同体であります。パウロの書いた**エペソの手紙 2 章**にも同じことが繰り返されています。イエス・キリストにあってユダヤ人と異邦人の間にあった隔ての壁というものが打ち壊されたと。このイエス・キリストが私たちの平和であると。異邦人とユダヤ人の間の敵意は、このイエス・キリストによって取り払われて、そしてこのイエス・キリストにあって異邦人も聖なる国民、イスラエル人と同じもの。そして神の家族とされたと。**エペソ 2 章**でも確認されております。それが**福音の真理**であります。「ユダヤ人でなければ救われない。割礼を受け

なければ救われない。」それは福音ではないと。それは教会ではないと。イエス・キリストはすべての人のために十字架に掛かって死なれました。その十字架のイエスの頭の頭上には罪状書が書かれましたけれども、それは世界中の人たちの言葉で書かれたわけです。『ユダヤ人の王、ナザレのイエス・キリスト』です。それはヘブル語でも、ラテン語でも、ギリシャ語でも書かれた。すべての人の救い主、世界の救い主としてイエスは十字架に掛かって死なれたわけです。そのイエスの脇腹から血と水が分かれて出たわけですが、そこから新しい命が、新しい共同体が生まれたわけです。ちょうど最初の人アダム^{アダム}の脇腹から花嫁のエバが造られたように、最後のアダム^{アダム}の脇腹からキリストの花嫁と呼ばれる教会が、それはもうユダヤ人もギリシャ人も異邦人というその違いがない、そんな新しい命が、新しい共同体が生まれたわけであります。ですからユダヤ人クリスチャンだとか、異邦人クリスチャンだとかという区別というのは、本来はないわけです。勿論神様はイスラエルにおける特別な計画をお持ちでありますけれども、しかし、ユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャン。そのような区別はもうなくなったということです。イエス・キリストが来られる前は、世界の人々は 2 種類に分けられておりました。ユダヤ人か、非ユダヤ人か。すなわち異邦人か。その 2 つに 1 つという区別が存在しましたけれども、イエスが来られてからはそのような区別はもうなくなったわけです。皆イエスを信じるならば、神の子どもとされる特権が与えられる。そしてキリストの花嫁とされる。そしてまた彼らの国籍は天にあると言われるわけです。ですから、日本人クリスチャンとか、アメリカ人クリスチャンとか、韓国人クリスチャンとか、朝鮮人クリスチャンとか、中国人クリスチャンとか、そんな違いはもうないということです。キリスト・イエスにあつて私たちは皆 1 つとなっているわけです。敵意は全て取り払われているわけです。平和・平安というものがイエスによって与えられていますから私たちはお互いに和解して、そして違いを超えて一致出来る、一体化されるということです。同じイエスというアイデンティティーを持つ者となったわけです。それがキリスト者です。それがクリスティアノスであります。素晴らしい共同体です。そのような共同体はこの世には存在しません。

そして、このガラテヤ 2 章 5 節を見る時に私は、もしパウロがこの割礼派と呼ばれる人たち、偽兄弟のユダヤ教主義者たちに対して一時でも譲歩してしまったならば、ということを考える時に、パウロの書簡は書かれることもなく、すなわち新約聖書は完成することもなく、そしてその新約聖書の上に立てられる教会も立てられることもなく、この極東のイスラエルからしたら世界の果ての日本人の私たちがきっと救われることはなかっただろう、という思いを持つわけです。ですから本当にパウロの勇気は有難いなと思います。多勢に無勢というところでもあったと思います。パウロはそもそも使徒としても疑われておりましたし、かつて教会を迫害したわけですから、肩身の狭い思いもしていたと思います。行く先々で「あいつは俺たちをあんな目に遭わせた奴。極悪人、殺人犯。」と指も差されたと思います。でも、それでもパウロは福音の真理を前にして一時も譲歩しない、一切の妥協をしない。そのおかげで沢山の手紙が書かれ、そして新約聖書は完成し、そしてその上に福音的な教会が立てられて、そしてユダヤ人だけでなく異邦人の私たちに救いもたらされ、そしてこの日本にもキリストの教会が立て上げられるようになった。それは偏^{ひとへ}にパウロが譲歩しなかったからだとも言えます。このたった一つのちょっとした行為、それが時間を経て時空を超えて、国を超えて、民族を超えて、どれだけ大きな影響をもたらすのか。それは実に計り知れないものだということを思うわけであります。そして、それを皆さんにも当てはめて頂きたいと思います。あなたの一時の譲歩が、あなたのちょっとした妥協が、どれだけの影響を、その影響というのは勿論負の影響となるわけです。若しくは負の遺産となるわけです。それを後代に残してしまうのか。自分の子供や孫や家族に与えてしまうのか。あなたの譲歩が、あなたの妥協が、どれだけ悪い影響をもたらすのかということも覚えて頂きたいと思います。パウロが譲歩していたら、パウロが妥協していたら、今の私たちはなかったはずであります。あなたが妥協したから、あなたが譲歩したから、だから彼らはひょっとしたら救われないのかもしれない。そのことも考えて頂きたいと思います。

そして、6 節。『そして、おもだった者と見られていた人たちからは、——彼らがどれほどの人たちであるにしても、私には問題ではありません。神は人を分け隔てなさいません。——そのおもだった人たちは、私に対して、何もつけ加えることをしませんでした。』主立った人たち、2 節にも使われていました。所謂 VIP です。重要人物。エルサレムの教会の重鎮たち。ペテロとヤコブとヨハネが勿論この中には入っているわけです。三本柱。柱として重んじられ

ている人たちとも言われています。そうした主立った人たちに対して、パウロは**福音の真理**を大胆に語り、そして彼らがどんなに有名であろうと、どんなに重んじられていようと、顔色を見ることなく「間違っているものは間違っている。正しいものは正しい。」という明確な態度をとったわけです。神は人を分け隔てなさいませんと、パウロは言っています。

使徒の働き 10 章 34 節も見て頂きたいと思います。これはペテロの言葉です。『そこでペテロは、口を開いてこういった。「これで私は、はっきりわかりました。**神はかたよったことをなさらず、**」』神はかたよったことをなさない。これは言い換えれば、神様は偏見を持たない、えこひいきしない、差別を設けないお方であるということです。そして、**ガラテヤ 2 章 6 節**の『**神は人を分け隔てなさいません。**』というフレーズを詳訳聖書ではこのように訳しております。『神が人々の占める地位によって動かされる事はありません。』神が人々の占める地位によって、肩書きによって、役職によって、経歴によって、動かされる事はないと。人はうわべを見るが、神は心を見ると言われます。牧師だから、宣教師だから、預言者だから、使徒だから。そのような地位だとか、肩書き、役職、そうしたことで、タイトルで神様が人を分け隔てする、えこひいきする、差別する、ということはないということです。神様がそういう方ですから私たちもそれに倣う必要があります。でもこの中にはひょっとしたら肩書きに弱いという人もあるかもしれません。役職に弱い。牧師だとか言われると、〇〇の教授だとか言われると、有名な先生だとか言われると、ついつい偏って見てしまう。分け隔てしてしまう。差別を設けてしまうという人もあろうと思います。でも、そうであってはいけないということを感じて頂きたいと思います。主にある兄弟、姉妹であります。そこには優劣はないということです。そこには階級、叙階、位階といった制度はないということです。すべての人は主のしもべです。主の奴隷です。奴隷に身分なんかそもそもないということを知って下さい。奴隷の身分は、強いて言えば奴隷であります。私たちは皆主のしもべとしてある意味で平等な立場にある。主にある兄弟、姉妹、神の家族ですから、そこには上下関係はないということです。牧師も信徒もそこには差がありません。昔から日本では牧師のことを、プロテスタントでは特にそうですけども“先生”。そして信徒のことは“平信徒”。“平信徒”なんていう言葉が未だに使われます。それは明治初期に牧師になった人たちのほとんどが士族の者、所謂武士の人たち。江戸時代から土農工商でまだその影響が残っていたので、武士は偉い人、先生と呼ばれる人たち。そして一般庶民は平信徒ということで、そこには身分の差というものがあつたわけです。でも、そうあつてはならないということです。ですからこの教会で私のことは、誰も“先生”とは呼びません。皆ファーストネームで呼んでくれるのは、非常に嬉しいことです。それは聖書的であります。勿論親しみを込めて“先生”と言うこと自体、私は禁じるつもりはありませんけれども、でも出来たら私のことは“先生”と呼ばないで欲しいと思います。

話を戻したいと思いますが、パウロに対してその主立った人たち、VIP のエルサレム教会の指導者たちは、何もつけ加えることをしなかった。つまりパウロがやっていたミニストリー、異邦人宣教というものは、これは正しい、それは聖書的なものである、と彼らも承認した、確認して追認したということです。そしてパウロの異邦人使徒としての権威も認めたということです。**使徒の働き 15 章**のそのエルサレム公会議の中でも、このことは言及されています。お読みしますから聞いて下さい。**使徒の働き 15:11**『**私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそうなのです。**』語り手はペテロです。あの人たちというのは、パウロ、バルナバのことです。そして彼らの宣教を通して救われた異邦人クリスチャンたちも皆イエスの恵みによって救われたのだと。ユダヤ人の律法の行ないによって、割礼を受けることによって救われたわけではない。ユダヤ人クリスチャンも主イエスの恵みによって救われた。異邦人クリスチャンも同じく主イエスの恵みによって救われた。そのことが確認されたわけです。パウロたちのやっている異邦人宣教は、これは間違いではない、有効なものであるという確認が取れたわけです。

テキストに戻って頂いて、**ガラテヤ 2 章 7～9 節**を見て下さい。『⁷それどころか、ペテロが割礼を受けた者への福音をゆだねられているように、私が割礼を受けない者(割礼を受けない者というのが異邦人です。)への福音をゆだねられていることを理解してくれました。⁸ペテロにみわざをなして、割礼を受けた者(すなわちユダヤ人)への使徒となさった方が、私にもみわざをなして、異邦人への使徒として下さったのです。⁹そして、私に与えられたこの恵みを

認め、柱として重んじられているヤコブ(主の兄弟ヤコブ。誤解のないように、ヤコブというのはヨハネの兄弟ではありません。)とケパ(そしてケパというのがペテロのことです。ペテロはギリシャ語ですが、ケパというのがアラム語です。ペテロもケパも同じ意味で“岩”という意味です。イエスがシモンに与えたあだ名です。ニックネームがもう定着しているわけです。)とヨハネが、私とバルナバに、交わりのしるしとして右手を差し伸べました。それは、私たちが異邦人のところへ行き、彼らが割礼を受けた人々のところへ行くためです。』“交わりのしるしとして右手を差し伸べました”というのは、これは承認してくれたということです。右手というのは権威のシンボルでもあります。ですから使徒たちと同じもの、同等の権威を持つ、また同じ同労者であるということを確認したわけです。ですから先程も触れたように、主の働き人、主のしもべにおいては優劣はない。割礼を受けた者への使徒も、また割礼を受けていない者への使徒も、皆これは同じ主が召した者たちであります。同じ主の働きでありますから、そこには優劣はないということです。ユダヤ人宣教も異邦人宣教も、そこには優劣はない、違いはない。同じ主の働きである。同じ主を宣べ伝える働きである。ですからその働きを担う者たちにおいても上下関係などないということです。階級など勿論ありません。そして、それらは結局のところ恵みによるものだと、9節で確認されています。恵み、分不相応な者に与えられる過大な親切。特別な能力があるから、資質があるから、資格があるから、経験があるから、そういうことは一切問われなないということです。むしろこれは相応しくない者に与えられる働き、恵みです。「相応しくないからこそ相応しい。」というのが正しいわけです。かつて教会を迫害したほどの人物でも用いられるということです。そして割礼を受けた者へのメッセージと、割礼を受けていない者、すなわちユダヤ人と異邦人に対するメッセージは本質的には全く同じ。そこには何の差もない、何の違いもないということです。このように教会の中にはいろいろな働きがあります。いろいろなミニストリーがあります。そして、そのミニストリーにおいては強調点もそれぞれあるわけです。異邦人宣教、ユダヤ人宣教。それぞれ特色があるわけです。持ち味があるわけです。いろんなタイプ、いろんなカラーがあるわけです。でも、それらが違ったとしても同じメッセージを伝えている、同じ主に仕える同じ働きであります。同じ信仰、同じ宣教。そこを履き違えてはいけません。ミニストリーの強調点が違って、それぞれの特色が違って、カラーが違って、同じ教会の中で成される働き、同じキリストの体の中で成される働きですから、それぞれ体の器官が異なって機能が違って、それは同じ働きである。同じ教会の働きであるということも覚えたいと思います。自分たちと違うからといって差別してはいけない。自分たちと同じことをしてないからといって、彼らは私たちに劣っているとか、私たちがの方が彼らよりも優れているとか、そのような差別を設けてはいけないということです。

初代教会におけるメインキャラクターというのがここに一堂に出ております。すなわちエルサレム教会の三本柱のペテロ、ヤコブ、ヨハネ。そして、それに加えてパウロという人物。ペテロ、パウロ、ヨハネ、ヤコブ、教会史を通してこの4人のキャラクターが教会の形成に大きな影響をもたらしています。この4人の使徒たちのキャラクターが、人格化した教会というものが教会史を通して形成されてきたという事実を見ることが出来ます。ちょっと難しく聞こえるかもしれませんが、今から説明しますから聞いて下さい。ペテロ、パウロ、ヨハネ、ヤコブ的な教会が形成されてきたということです。

まずペテロから始めて行きたいと思います。ペテロは割礼を受けた者、すなわちユダヤ人に対する使徒だったということは言いましたけれども、そのペテロにはユダヤ人のフレーバーというものが色濃く残っています。ユダヤ人的ということです。その彼の書いた**ペテロの手紙第一第二**の中でも、(つい最近学んできたところですから記憶に新しいと思います。)度々イスラエルの律法の話も持ち出されて、霊的祭司という話です。すべてのクリスチャンはキリストに連なる祭司である。霊的祭司職とか、霊的ないけにえに関する話。または教会のことをペテロは“**霊の家**”とっています。**霊の家の上に築き上げられなさい**、なんていうフレーズも使っています。そしてイエス・キリストことを“**魂の牧者であり監督者である**”というふうに見なしています。監督者というのは、別の言い方で言うならば「キリストは司教である。」と、ビショップと英語で言います。そういうフレーバーをペテロは持っているわけです。ユダヤ人的なフレーバー、持ち味と言って良いと思います。そして、そのようなペテロの影響を受けた教会、流れを受けた教会、ペテロ的な教会と言って良いと思います。そういう教会は今日も存在します。すなわち制度的、儀式的な教会。文字通り

監督制の教会。ビショップを置いているような教会。司教を置いているような教会。具体的には、ローマ・カトリック教会。実際にローマ・カトリック教会のローマ教皇は、ペテロの後継者と見なされています。初代ローマ教皇はペテロであると彼らは考えています。または正教会、オーソドックスと言います。ギリシャ正教会、ロシア正教会とか、エチオピア正教会、いろいろありますけれども。その正教会もやはり監督制であります。またプロテスタントに属する聖公会、イギリス国教会とも言います。その聖公会もやはり監督制。いろんな制度、儀式、そうしたものを非常に重んじる、そうしたものにこだわる、そういう教会が今日も存在します。勿論プロテスタントの中で聖公会だけではなくて、今日の主流派と呼ばれるメインラインプロテスタントの中にも、伝統的な大きな教団教派の中にも、制度を重んじるどころ、伝統を重んじるどころ、儀式を重んじる、そういう教会も沢山あります。カトリックだけではないということも覚えて欲しいと思います。そういった教会はすべてひっくるめてペテロのフレーバーを持った教会、ペテロ的な教会と言えるでしょう。

次にパウロの流れを受けた、影響を受けた教会。パウロはこの手紙を通して分かるように、彼は完全に型破りです。伝統をぶち壊すような人。でも、その伝統は勿論聖書的でなければということです。そして福音の真理をまっすぐに説いて、そして恵みによる自由。それは信じるだけで救われるという非常にシンプルなものです。儀式だとか、伝統だとか、制度だとか、そんなものは不要であると。もう単純明快な救いです。でも、その一方でバランスがあります。福音の真理においては絶対に譲歩しない。一切の妥協をしない。福音の真理のためならば敢然と立ち向かう。猛然と抗議する。まさに福音主義の教会ということです。福音を曲げる者、聖書から外れる者に対して、敢然と立ち向かう、抗議する。**ガラテヤ 2章 11節**のところにも、パウロはケパ(ペテロ)に対して面と向かって抗議したとあります。抗議するという言葉は、勿論英語では“**プロテスト**”ということです。プロテストする人たち、すなわちプロテスタント。プロテスタントというのは、元々はカトリックに対して非聖書的な部分「贖宥状なんていうものは、免罪符なんていうものは認められない。そんなことは聖書に書いていない。金を出して救いを買うとか、天国行きの切符を買うなんていうことは、こんなことは絶対にあってはならないこと。それに対しては断固として抗議します。断固としてプロテストします。」それがプロテスタント。それが福音主義。それが福音派という教会です。ですからパウロ的な教会というのはまさにこの福音主義に立つ宗教改革以来のプロテスタント教会を表すと行って良いと思います。ただし、残念ながらこのプロテスタントの中にも先ほども言ったように聖書から外れた人たちもあります。伝統に縛られている人たちもあります。でも、このパウロの影響を色濃く受けた人たち、宗教改革者のルターはその最たる人です。**ガラテヤの手紙**を通して宗教改革を断行したわけです。また私の尊敬するスポルジョン。このスポルジョンも当時はプロテスタントの教会が聖書から外れて行こうとしていました。いわゆる自由主義神学ということで「聖書はすべて神の靈感によるものではない。」神の言葉の権威を薄めたり、また軽んじるような動きがあった時にスポルジョンは敢然とそれに対しては立ち向かったわけです。ロイド・ジョーンズという牧師も私は尊敬していますが、彼もエキュメニカル運動に対して断固として反対しました。エキュメニカルというのは、自由主義神学にかぶれた人たち、そういう人たちがプロテスタントの福音主義を捨てて、そして「カトリックと手を組もうじゃないか。」一見仲良くして「一緒に働きましょう。一致を目指しましょう。」というふうに見えるかもしれませんが、そこには真理はなかったわけです。ルターが言うように「**真理無しの一一致は背任である。**」と。「**そのエキュメニカル運動は背任行為だ。**」と言ったのがロイド・ジョーンズです。

またナチス・ドイツのヒトラーに抵抗して、最期は殉教したディートリッヒ・ボンヘッファーという人がこう言っている言葉を聞いて欲しいと思います。「**カトリックに反対してさえいけばプロテスタントなのではない。本当のプロテスタントは、自らプロテストし、自らを改革するのだからなければならない。**」名ばかりのプロテスタントではいけないということです。私たちが妥協しやすいということです。私たちが福音の真理を曲げてしまうような弱い者である。ちょっと圧力がかかると、ちょっと弾圧があったり、ちょっと仲間外れにされそうになったら、平気で自分の信念・信条を曲げてしまう、妥協してしまうような者。だから私たちはそんな自分に対してプロテストしなければいけない。それが真のプロテスタントであると、ボンヘッファーは言っております。そして、それはパウロ的であります。

3 番目のヨハネですけれども、ヨハネ的な教会。それはどんな教会かという、実に霊的で神秘的で黙想的な教

会と言って良いと思います。実際にヨハネの書いた福音書、それは霊的福音書と呼ばれます。黙示録は勿論最たるものです。そして、そのような霊的・神秘的・黙想的、英語で言えば mystic というような教会。聖霊が豊かに働く、聖霊の現れが全面的に押し出されるような教会。それは今日のペンテコステ運動、ペンテコステ系の教会、聖霊派と呼ばれるような教会に受け継がれていると言って良いと思います。勿論これはプロテスタントだけではなくて、カトリックの中にも見られる動きであります。トマス・アケンピスという人、ブラザー・ローレンスという人が、そういう運動の代表者と言って良いと思います。また A・W・トーマーという人も皆私の尊敬する人たちです。彼らの著作を皆さんにはお薦めしております。

4 番目のヤコブですけれども、ヤコブについてはヤコブの手紙 1 章 27 節で、ヤコブの特色、フレーバーが出ております。『父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることで。』これがヤコブ的教会です。そして、ヤコブの手紙の中で勿論強調されていることは、信仰の行ないです。信仰を見せると、ヤコブは言うわけです。口先だけではない信仰。行いのない信仰は死んだものであると。そして、その信仰が行いに現れると、ここで言われているような孤児や、やもめたちが困っている時に世話をするものだ。そして、この世から自分をきよく守ることで。そのようなヤコブ的な教会というのは今日キリスト教社会主義とか呼ばれたり、社会派と呼ばれるこういう動きというのは、エキュメニカル派と呼ばれる実は自由主義神学によって生み出されたグループの中に多く見られます。私はその自由主義に対しては断固として反対しますが、その教理の部分では全く合いませんけれども、でも彼らの中でやっている社会運動、これに対しては心から賛同します。ですからこれまで日本の歴史を見てもそうなんですけれども、このクリスチャンの中から社会運動家として例えば賀川豊彦という人。神の国運動というものが展開され 100 万人の救霊が叫ばれて、そしていろんな貧困に苦しんでいる人たち、または公娼制度とって国が売春業をやっているわけですから、それによって性奴隷とされていた人たちを解放するような運動。それを救世軍も行ったわけです。救世軍もヤコブ的な教会と言って良いと思います。サルベーション・アーミー”salvation army”日本では山室軍平という人が有名です。また石井十次という人も“孤児の父”と呼ばれています。また“社会福祉の父”と呼ばれているのもやはりクリスチャンで留岡幸助という人。石井十次、留岡幸助、そして山室軍平。この3人は日本を代表する社会運動家であり、勿論賀川豊彦もその後現れるわけですが。有名なクリスチャンとして私は心から尊敬しております。ただ彼らは皆日本キリスト教団の出身であります。今日のエキュメニカル派と呼ばれるグループです。何度も言いますが私には教理の面では一切賛同するつもりはありません。私は彼らと違って、聖書はすべて神の靈感によって書かれたものだと思っています。そして、イエス・キリストだけが救い主だと信じています。残念ながらエキュメニカル派の信仰では、何でもありと。別にどの宗教でも救われると。そのような福音を否定するようなことまでも説いていますので、私はそこは一切妥協するつもりはありませんが、でも彼らの中の社会派と呼ばれる人たちの社会運動。社会を良くしたい。社会を改良していきたい。ただし、それを人間の力によって成すのは、これは間違っております。世界平和を目指していく。環境を良くしていく。それを人間の力、教会の力、組織の力によってではなくて、キリストの力によって成していく。神の愛によって成していく。カトリックでもマザー・テレサの宣教会も、それもまた素晴らしいヤコブ的な教会の姿だと言えます。

そうしたいろんな教会、教団、教派。様々な特色や持ち味、カラー、タイプがあるということを私たちは知っておりますし、それを私たちは認めなくてはならないということです。ペテロ的、パウロ的、ヨハネ的、ヤコブ的教会が今日も存在します。しかし、それらを私たちはペテロの教会、パウロの教会、ヨハネの教会、ヤコブの教会とは呼びません。それらは全てキリストの教会と呼ぶわけです。そのキリストの教会という体の中にいろいろなタイプがある、いろいろなカラーがある、いろいろな特色、強調が違ったミニストリー、カラーがあるということは認めたいと思います。教会の頭は人間ではありません。それは人間となられた神、イエス・キリストであります。教会の頭はペテロではないのです。ペテロの後継者、ローマ教皇ではないわけです。教会のかしらはカリスマ牧師じゃないんです。教会の頭はイエス・キリストであります。ですから他と違って私たちが同じキリストの教会として認めたいと思います。勿論残念

ながらキリストを頭としない偽の教会が存在することも確かであります。でもキリストを頭としているならば、たとえ私たちと違って、この MGF とプレーヤーが違って、カラーが違って、タイプが違って、強調点が違って、特色が違って、それでも私たちは尊重して認めて、裁かないということ、見下さないということをしていかなければなりません。この MGF が他の教会と比べて優れているなどと思ってはなりません。勿論皆さんはこの教会に主から召されて属しているわけですから、自分の属している教会を愛して誇りとする事自体、そのこと自体は何も間違っていない。この教会が自分にとって一番の教会だと主張すること自体、何も問題ありません。ただし、他の教会は間違っているとか、(勿論間違っている教会もありますけれども)ただこと違うからといって、ここよりも駄目だとか、ここよりも劣っているとか、この MGF 以外の教会はおかしい、ということは絶対に言うてはならない、考えてもならないということであります。独善的になってはいけません。プライドから他の教会を見下したり裁いたりしてはいけませんということを強調しておきたいと思えます。勿論認めるべき違いと認めてはならない違いというのがありますから、そこは履き違えてはいけません。エキュメニカルにおいては、私は認めてはならない違いがありますから、エキュメニカル運動には私は賛同しません。エキュメニカル運動に賛同しているのは、主流派と呼ばれるプロテスタントであります。日本では日本基督教団とか、ルーテル教会とか、また聖公会といった有名な伝統的な大きな教団教派でありますけれども、教理面で私は彼らに迎合するつもりはさらさらありません。ただし、他の面において賛同したいところはいっぱいあります。協力したいところはいっぱいあります。ですから認めるべき違いと認めてはならない違い。そこはしっかり線引きをして頂きたいと思えます。何でもあり、ということは絶対にあり得ないということです。一致の中の多様性、これは認めますけれども、しかし福音の真理を前にしたら私たちはしっかりと線引きをすべきだということです。一時も譲歩してはならないということが必ずあれば、譲歩してはならないということです。妥協はあり得ないということです。

10 節に今度は目を戻して下さい。『ただ私たちが貧しい人たちをいつも顧みるようにとのことでしたが、そのことなら私も大いに努めて来たところです。』この **10 節**は、私にとっては非常に面白いなと思うところです。ユーモア溢れるところと言っても良いかもしれません。エルサレム教会の重鎮たち、ペテロ、ヤコブ、ヨハネをはじめとした主立った人たちがパウロに対して「あなたは異邦人宣教に行つて良い。私たちはその働きを認めます。」と、お墨付きを与えたわけです。ゴー・サインを出したわけです。でもその一方で「俺たちに金を送ってくれ。」と言っているわけです。それはエルサレム教会を忘れないで欲しいと。実際に感覚としては「出稼ぎに行つてもいいけれども、送金は忘れてくれるな。」というようなニュアンスで言っているわけです。

使徒の働き 11:27~30 に、そこで預言者アガポを通して世界的な飢饉が起こるという預言がなされています。そしてその飢饉がまさにエルサレムを襲ったわけです。エルサレム教会は飢饉によって危機的な状況に陥ったわけです。飢饉で食べ物なくなる。これも大変なことですが、それに加えてエルサレム教会は弾圧されたわけです。これはユダヤ教徒からも弾圧されましたし、ローマ帝国からも弾圧されたわけです。二重の迫害を受けて、それにダブルパンチどころではなくトリプルパンチで、今度は飢饉も襲ったわけです。貧困に陥ったわけです。非常に窮乏したわけでありました。それに対してエルサレム教会のリーダーたちは、パウロに「あなたは異邦人世界に出て行って宣教するのは良い。そしてそこで沢山の人が救われて、沢山の教会が起こされる。これも素晴らしいことである。どんどん教会が拡張していく、教勢が伸びていく。爆発的にクリスチャン人口が増えていく。それは素晴らしいめでたいことである。」と。「だからといってエルサレムの母教会のことは忘れないで欲しい。私たちは非常に今苦しい。この貧困に目を留めてもらいたい。」だからここで「あなたのことは、私たちは認める。でも私たちのことも忘れないで欲しい。だから金を送ってくれ。」ということです。そして、そのこと自体は別に悪いことではありません。パウロもそのことを非常に重んじて、実際に**ローマ 15 章 25~27 節**でパウロはエルサレムの貧しい聖徒たちのためにきよきん贖金、いわゆる募金、寄付金というものを募って、そしていつも異邦人教会に対してそのことを訴えております。

また**第一コリント 16:1~3**、これもやはりコリントの教会に対して、またコリント周辺のアカヤの地方、ギリシャの地方のマケドニアのいろんな教会に対して、今日のトルコのいろんな町にある教会に対しても同じ勧めをして「エルサレム教会の貧しい聖徒たちのために私たちは寄付金を集めて、それを届けるべきである。」定期的に集金していた

わけです。私たちが今日あるのはエルサレム教会のおかげであると。霊的な祝福を私たちは彼らに負っているんだと。こんな素晴らしい恵み、こんな素晴らしい特権は、彼らの犠牲の上に立っているんだということ。だから私たちは彼らのことを覚えて物質的なこと、物理面においては私たちがサポート出来るんだから、お互いに助け合おうじゃないかと。そういう励ましをしながら勧めをしているわけでありませぬ。ですからそれに対してパウロは指をさされる筋合いはないと。むしろ積極的にパウロは各教会、異邦人教会に対して必ず集金しているわけです。そしてそのお金を自らの手でエルサレムに持っていくということもやっているわけです。そこで彼が悪く思われても、誤解されていても、そこには彼の命を狙うような人たちがいたとしても、それでもパウロはそのお金を直接エルサレム教会に届けるということ命がけでもするわけでありませぬ。ですから **10 節**にあるように『**そのことなら私も大いに努めて来たところですよ。**』ですからパウロには何の間違ひもない。誰からも指をさされるそんな落ち度はない。非難されるようなところは 1 つもないということ自ら主張しているわけです。

そして、そのことを踏まえて **11 節**。『**ところが、ケパがアンテオケに来たとき、彼に非難すべきことがあったので、**(パウロは自分にはまず非難されるところがないということ述べて上で、ケパ(ペテロ)には非難すべきことがあったので) **私は面と向かって抗議しました。**』ペテロはエルサレムを離れて北上してこのアンテオケに来たわけですよ。所謂異邦人のテリトリーに入ってきたわけですよ。そしてそこでペテロには非難すべきところが見つかったわけですよ。パウロはそのことを見て、面と向かって当人に抗議したと。これは勇気のあることだったと思います。使徒の頭、エルサレム教会の重鎮に対して、自分はまだまだ若輩者、後から救われた者。パウロも自身のことを**月足らずの者**とも言っていますし、**使徒の中では最も小さい者**とすら言っています。実際にパウロという名前は「小さい者」という意味です。そんな者がペテロに対して面と向かって抗議する。それは勇気のいったことですよ。でもそうせざるを得なかったという事実があったということですよ。非難すべきところがあった。その非難すべきところというのは勿論福音の真理に反すること。それは偽兄弟たちと全く同じ問題、割礼派と呼ばれる教会の中に忍び込んできた偽教師・偽牧師たちと似たような問題をペテロが、こともあろうにアンテオケの教会の中で起こしてしまった。それに対してパウロは一時も譲歩することなく面と向かって抗議した、プロテストしたわけですよ。あからさまにペテロを責めたわけですよ。そしてこれは聖書的な行為でもあります。なぜならば**箴言 27 章 5~6 節**にこう書いてあります。『**あからさまに責めるのは、ひそかに愛するのにまさる。**⁶ **憎む者がくちづけしてもなすよりは、愛する者が傷つけるほうが真実である。**』あからさまに責める。これはひそかに愛するのにまさる。陰口を叩くことはたやすいことですよ。「あの人はあんなこと言った、あんなことやった。」と、本人の居ないところで本人を非難する。当人の居ないところでゴシップを。そういうことは誰でも出来ますし、でもそれは実際にはその人を愛する行為ではありません。本当にその人を愛しているならば、時に私たちはあからさまに責める必要があります。非難すべきところ、罪があるならば、その罪がどれだけの影響をもたらすのか、どれだけの弊害をもたらすのか。本人にとってそれは決して良くないこと、そして本人だけじゃなくて周りにも影響が及ぶことであるならば、私たちは黙って見過ごすわけにはいきませぬ。勿論愛を持って語る必要があります。**兄弟が罪に陥っていたならば、柔和な心で正してあげなさい。**それがガラテヤの末尾のところ、**6 章**のところ語られておりますから、パウロはそうしたと思います。でも、恵みは無駄にしてしまうようなこと、キリストの十字架の死がまるで無駄死に、犬死にだというようなことを言ったり教えたりするような者に対しては、もう相手が誰であろうとパウロは関係なく猛然と猛烈に抗議するわけでありませぬ。ですが、ここで注意して頂きたいのは、パウロは自らがエルサレムに行って、そしてペテロに対して面と向かって抗議したんじゃないんです。パウロがエルサレムに乗り込んで、ペテロに対して「おまえ、サーモンデュークセル食べてみる。このポークソーセージ食べてみる。この BLT サンド食べてみる。ベーコンサンド食べてみる。」とか、そういうことをパウロがペテロに言ったわけじゃないということですよ。そうではなくて、ペテロがパウロのテリトリーにやって来たわけですよ。すなわち異邦人のテリトリーにやって来たわけですよ。そして、そこでペテロは何をしたかという、パウロがミニスターしていた人たち、パウロが仕えていた人たちに対して、ペテロが間違った方向へと彼らを誘おうとしたわけですよ。パウロが仕えていた人たちに対してペテロが間違った方向へと導こうとした、進ませようとした。それに対してパウロが面と向かってペテロに対して抗議したわけですよ。一言

で言うならば「あなたは偽善者だ。」と。「あなたのやっていることは偽善だ。」と言ったわけです。そして、そのような抗議の仕方は間違っていない。正当化されるべきものだということです。同様に私も牧師として、羊飼いとて、この群の中に福音の真理に沿っていない間違った方向へと進ませるようなそういう考え、そういう教えを持ち込むような人たちに対して、この群に入って来た人たちは私は、この群から追い出します。実際に出て行かせるということはありません。だからと言って私が他の教会に行き、その辺の教会に行き「あなたたちのやっていることは間違っている。」と糾弾して断罪して、そして彼らに矯正を求めるなんていうことは、私は致しません。ただこの教会に入り込んで来たならば、忍び込んで来たならば、私も面と向かって抗議して、その人が誰だろうと、どんな肩書きを持ってしようと、どんな経歴を持ってしようと、私はそこで断罪し、非難し、そして言うことを聞かなければ、指示に従わなければ、彼らをこの教会から出します。それは私のやるべきことであり、それは正当化されるべきものです。パウロがやったことは、これは正当化されるべきことです。ペテロに対して面と向かって抗議する。大それたことだと人から思われたかもしれません。そんなことはパウロがすべきではないと、指をさされたかもしれませんが、でもそれは決して間違っていないということです。アンテオケはパウロのテリトリーです。主が異邦人使徒としてパウロそこに遣わしたわけです。言わばパウロの陣地、パウロの縄張りです。その縄張りを荒らしに来たのがペテロと、ちょっと乱暴な言い方かもしれませんが、縄張りに入ってきた者を追い出す。それは当たり前のことです。一方でエルサレムがペテロの縄張りと言って良いかもしれませんが、そこにパウロが行ってかき乱すなんていうことは、パウロはやらないわけです。

11 節に今度は目を移して下さい。『非難すべきことがペテロにあった。』とありますけれども、これは興味深いことです。なぜならば、ローマ・カトリックにおいては、ペテロというのが初代教皇とされています。歴代の教皇、今も新しい教皇が選出されたばかりです。フランシスコ一世もペテロの後継者ということなんですけれども。そして、そのカトリックの教義において『**教皇不可謬説**』というのがあります。それは端的に言うと、教皇は過ちを犯さない。間違ったことは言わない、教えないと。“不可”というのが「出来ない」、「謬」というのが「誤ることはない」ということです。英語で言うと Papal Infallibility というものですが、それは1つのカトリックの教義であります。具体的には、正確にはこういうものです。信仰および道徳に関する事柄について教皇座(エクス・カテドラ)から厳かに宣言する場合、その決定は聖霊の導きに基づくものとなるため正しく、決して誤り得ない。これは教会が長きに渡って伝統として教えてきたこと含めて。これに対して反対するもの、『**教皇不可謬説**』は、これはおかしいと反対する人たちはカトリックにおいては“**アナテマ**”と言われます。私は勿論これに反対しますから、彼らから“**アナテマ**”と言われるわけです。“**アナテマ**”というのは、先週見たギリシャ語です。「**のろまれるべき**」という言葉が**ガラテヤ1章8～9節**に使われていますが、その原語が**アナテマ**です。カトリックが使う時、それは破門を意味します。要するに地獄行だということです。『**教皇不可謬説**』これは間違いだと言え、カトリックからは“**アナテマ**”と言われます。そして実際に、信仰および道徳に関する事柄について教皇座から厳かに宣言されたカトリックの教義の中に、こういうものがあります。1854年に教皇のピウス9世という人が、『**聖母の無原罪の御宿り**』という教義を発しました。厳かに宣言したわけです。聖母マリアです。聖母マリアは原罪がない。要するにイエス・キリストと同じ、神の母ですから原罪を持っていない者であると。無原罪マリアとも言います。そういう教義というものを、ピウス9世が厳かに宣言したわけです。昔からもうその前からそのような考えが長きに渡ってカトリック教会の中に伝統的な教えとしてあったんですが、それを公式にピウス9世が、『**聖母の無原罪の御宿り**』と。これに反対する者は“**アナテマ**”と言われるわけです。また1950年に同じくローマ教皇のピウス12世という人が、奇しくも同じピウスという名前ですが、『**聖母の被昇天**』という教義を打ち出しました。聖母マリアがイエスと同じように天に上げられた、昇天したと。生きた者です。勿論そんなことは聖書に書いてありません。その日が8月15日、日本のいわゆる終戦記念日となっていますけれども。「そんなことは聖書に書いていないから反対します。」と言え、勿論カトリックからは“**アナテマ**”と言われるわけです。教皇は決して間違ったことは言わない。何でもかんでも言わないという意味ではありません。先ほど言ったように、信仰および道徳に関する事柄について教皇座(エクス・カテドラ)から厳かに宣言された場合。そして過去のローマ・カトリック教会において伝統的

に教えられたことと反しない限り、ということです。絶対にローマ教皇は間違っことは言わない、罪を犯さない。」という意味ではありません。でも、彼らは大分間違っことを言ってきたわけです。それを今もカトリックは引き継いでいるわけです。公式見解として、公式な教理として受け継いでいるわけです。そして、ローマ教皇の不可謬説、こんなものも聖書的でないと、私はハッキリと宣言しますけれども、でもそのことを考える時、ローマ・カトリックがペテロのことを初代ローマ教皇と見なしている事実。それがちょうど**ガラテヤ 2:11** では、その初代ローマ教皇であるはずのペテロには、いっぱい非難すべきところがあったというところ。それは皮肉でもあると思います。ローマ教皇のその不可謬説というのは、初代ローマ教皇のペテロを見るだけでも間違いだということが分かってくると思います。ペテロにおいては間違いだらけ、非難されるどころばかりということです。何回も何回もペテロが失敗していることを私たちは知っています。でも、神様は恵みによってペテロのような者も用いて下さるということです。

12 節の方に目を移して頂いて『**なぜなら、彼は、ある人々がヤコブのところから来る前は異邦人といっしょに食事をしていたのに、その人々が来ると、割礼派の人々を恐れて、だんだんと異邦人から身を引き、離れて行ったからです。**』初代教会においては『**アガペー**』と呼ばれる愛餐会が毎回行われていました。それはこの教会でも行っている『**ポトラック**』のディナーと見て良いと思います。教会には貧しい人たちも集まっていたから、まともに食事がとれないという人たちもいたわけです。奴隷なんかでもこき使われてまともな食事が与えられない場合もあったわけです。でも教会に来ると沢山のご馳走に与ることが出来たわけです。貧しい人たちもそこで食べ物にありつくことが出来たわけです。ですから「お金に余裕のある人たち、ない人たちも含めて皆で共同体で助け合おうじゃないか。皆で出し合って、皆で持ち寄って、ポトラックで食事を共にした。毎日毎日そのような食事会、『**アガペー**』と呼ばれる愛の食事会・愛餐会が教会では行われていたわけです。そして、それは私もこの教会では大事にしているところがあります。そのような愛餐会においてユダヤ人クリスチャンもあれば異邦人クリスチャンも勿論あったわけです。それらには先ほども言ったように差異は無い、差別は無いということで、一緒に食事が出来たわけです。ところがユダヤ人の中では、一緒に食事をするということはその食事を共にする者たちと一体化するというそういう意味合いがあるということを彼らは知っていました。ですからユダヤ人たちは、決して異邦人とは絶対に食事を共にしないということを慣習としていたわけです。なぜならば異邦人は罪人であって、罪人と一緒になりたくない。だからユダヤ人は決して異邦人とは食事をしない。異邦人と食事をするとは、これはタブーであった、**禁忌**であったということです。ところがペテロは異邦人の食べ物を食べたばかりか、異邦人と一緒に食事までしている、会食までしている。完全にユダヤ教の掟破りをしてしまっている。ユダヤの慣習を完全に破っているということです。実際に**使徒の働き 11 章**を見て頂くと、パウロよりも先に既にペテロは異邦人と一緒にご飯を食べているわけです。ローマの百人隊長の**コルネリオ**の一家と一緒にご飯を食べている。そのご飯というのはユダヤ人の食物規定に反するものも食べているわけです。勿論そのことについては、イエス・キリストがペテロに幻を与えて、汚れているとされている律法違反になるものでも汚れているとは言うてはいけなと、一緒に異邦人とご飯を食べるように、そして彼らに福音を宣べ伝えていくようにという幻を、啓示を受けたわけです。その啓示に従って、最初は少し躊躇したのですけれども、抵抗があったんですがペテロはイエスに従って異邦人の食べ物を異邦人と一緒に食べたわけです。そして彼らと**1 つ**になったわけです。救いがコルネリオの家にもたらされたわけです。素晴らしい体験をペテロはしているわけです。ところがこのアンテオケに来た時に、ヤコブのところから来た人々、それが所謂エルサレム教会から来て、そしてヤコブの弟子だと勝手に名乗っている割礼派の人たち。勿論ヤコブが遣わしたわけではありません。**使徒の 15 章**を見れば明らかですけれども。ただヤコブというビックネーム、主の兄弟というビックネームを使って、利用して来た人たち。彼らは有力者でもあったと思われま。沢山の支持者を抱えていた人たち、そんな人たちが来た時にペテロは恐れをなしてしまったわけです。人間を恐れてしまったわけです。これも**箴言 29:25** に書かれている通りです。『**人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。**』ペテロはヤコブのところから来た割礼派の人たちを恐れてしまったわけです。そして急に手のひらを返して豹変してしまっのではなくて、テキストを見て頂くと**ガラテヤ 2:12**には“**だんだんと**”とあります。徐々にと。この辺がいやらしいですね。だんだんと、徐々に、長いものに巻かれていったという

ことです。一遍に変わってしまったら、一遍に態度を変えたならば、それはもうハッキリ分かってしまうので、分かりにくくしたわけです。あからさまに急に態度を翻すと、すぐに妥協したとか、指を差されてしまうので、ちょっとずつ段階的に分からないようにごまかすように。それがまさに偽善行為であります。ペテロの弱さ、醜さ、失敗ということです。“だんだんと”という言葉がミソです。

13 節。『そして、ほかのユダヤ人たちも、彼といっしょに(ペテロといっしょに)本心を偽った行動をとり、バルナバまでもその偽りの行動に引き込まれてしまいました。』本心を偽る行動、偽りの行動。これは共に偽善ということです。首尾一貫していない、言行一致していない行動です。それこそ非難されるべきところ。この偽善行為こそイエス・キリストが最も忌み嫌われたものであります。でも、この偽善こそ誰もが陥る罪でもあります。私たちが同じ罪を犯します。本心を平気で偽る。プレッシャーがかかってくると、自分にとってちょっと不利な状況があると、また長いものにすぐに巻かれようとする。偽りの行動に私たちが陥りやすいということです。この偽善というのは非常にいやらしいものでありまして、自分に出来ないことを他人に押し付けて、他人にやらせる。自分がやればいいんですけども、自分がやらなくせに、自分が出来ないくせに、他の人にはやらせようとする。他の人に強いる。それが偽善でもあります。ペテロは勿論知らないでやっていたのではありません。“だんだんと”という言葉が示唆しているように分かっているながらも、この偽善の罪に陥っていったということです。確認するために**使徒の働き 15:10～11 節**を読みたいと思います。ペテロの言葉です。『¹⁰ それなのに、なぜ、今あなたがたは、私たちの父祖たちも私たちが負いきれなかったくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです。(ユダヤ人たちが出来なかったことを異邦人の人たちに押し付けるなんて、あってはならないことであると。そして**11 節**で)¹¹ 私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちも(異邦人たちも) そうなのです。』と、これはペテロが言っている言葉です。ペテロはですから分かっていたんです。またペテロは**使徒の働き 5:29** でもこう言っています。『ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。「人に従うより、神に従うべきです。」私たちは人に従うよりも神に従うべきですと。割礼派の人たちが何と言おうと、彼らがどんなビクネームを持ち出そうとも、私たちは主に従うべきであると。分かっていたのに。偽善の罪に陥る人たちは皆分かっています。自分が間違っていることぐらい皆分かっています。自分が首尾一貫していない、言行が一致していないこと、分かっているながらもやってしまうわけです。私たちにペテロ的な弱さがあります。

そして、そのペテロの偽善の罪に対して他のユダヤ人たちも巻き込まれていった。ペテロと一緒に本心を偽る行動、そしてあのバルナバさえも、バルナバと言えば勿論パウロの親友であり、パウロの同労者です。宣教仲間であり、パウロの恩人でもあります。使徒の働き 9:26～28。(『²⁶ サウロはエルサレムに着いて、弟子たちの仲間にはいろいろと試みたが、みなは彼を弟子だとは信じないで、恐れていた。²⁷ ところが、バルナバは彼を引き受けて、使徒たちのところへ連れて行き、彼がダマスコに行く途中で主を見た様子や、主が彼に向かって語られたこと、また彼がダマスコでイエスの御名を大胆に宣べた様子などを彼らに説明した。²⁸ それからサウロは、エルサレムで弟子たちとともにいて自由に出はいりし、主の御名によって大胆に語った。』)仲間外れにされて煙たがられていたサウロを弟子たちに紹介して、弟子たちの承認を求めたのは、その橋渡しをしたのは、他ならぬバルナバだったわけです。そしてそのバルナバこそが、アンテオケで沢山の異邦人たち、若しくはヘレニストたちが救われたその様子を見るために遣わされた者、異邦人宣教の立役者となった使徒であります。使徒の働き 11:19～24。(『¹⁹ さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語りなかつた。²⁰ ところが、その中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、アンテオケに来てからはギリシヤ人にも語りかけ、主イエスのことを宣べ伝えた。²¹ そして、主の御手が彼らとともにあったので、大ぜいの人が信じて主に立ち返った。²² この知らせが、エルサレムにある教会に聞こえたので、彼らはバルナバをアンテオケに派遣した。²³ 彼はそこに到着したとき、神の恵みを見て喜び、みな心強く保って、常に主にとどまっているように励ました。²⁴ 彼ははりっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大ぜいの人が主に導かれた。』)アンテオケで救われた異邦人クリスチャンたち、ヘレニストクリスチャンたちを励ます目的でも派遣さ

れているわけです。実にバルナバという名前の意味は、「励ます子ども」「慰める子ども」、それがバルナバというニックネームです。そのバルナバまでもが、本心を偽る偽善に陥ってしまった。ペテロ 1 人の偽善の罪の影響力の大きさを見て欲しいと思います。あなたが譲歩してしまえば、あなたが偽善の罪を犯してしまうならば、周りも巻き込む。あなたより弱い者たち、立場の弱い者たち、信仰の浅い人たち、皆影響を与えてしまう。同調してしまうかもしれない。彼らも一緒に妥協してしまうかもしれない。そして、その結果教会の中に分裂が生じてしまうかもしれない。教会の一致が破壊されてしまうかもしれない。そして救いの根幹ですら、すなわち「信仰によって救われる。恵みによって救われる。」その信仰義認の最も大切な教えですら否定されてしまう。福音がもはや福音ではなくなってしまう。良い知らせではなくなってしまう。恵みがすべて台無し。キリストの十字架の贖いの死が、ただの犬死になってしまう。あなたの偽善がそうしてしまうということを知って頂きたいと思います。私の偽善が、私の妥協が、この教会全体に多大な影響を与えてしまいます。あなたの偽善が、あなたの子供たち・家族・孫にどれだけの影響を与えるのか。若いクリスチャンたちにどれだけの影響を与えるのか。是非覚えて欲しいと思います。残念ながら巻き込まれる者も少なくないということです。あなたに同調してしまう者も少なくないということです。

14 節。『しかし、彼らが福音の真理についてまっすぐに歩んでいないのを見て、私はみなの前でケパにこう言いました。「あなたは、自分がユダヤ人でありながらユダヤ人のようには生活せず、異邦人のように生活していたのに、どうして異邦人に対して、ユダヤ人の生活を強いるのですか。』偽善のやることだと言いました。自分に出来ないことを他人にやらせると。どうしてそんなことをするのか。「福音の真理について」、ここでは*印が付いていて別訳で「向かって」という言葉が使われています。「福音の真理について」「福音の真理に向かってまっすぐに歩む。」それはちょうど 19 節でも同じことが言われています。19 節の言い回しでは『しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。』福音の真理に向かってまっすぐに歩むということは、神に向かって生きることに他なりません。ですから、方向性を誤ってはいけません。間違ったゴールに向かってはいけません。間違った方向へ進むならば、間違ったゴールへ到達してしまいます。それはもう目も当てられない悲劇、惨劇、呪いということです。周りが、大多数が自分とは違う方向に進んで行ったとしてもです。皆がまっすぐに歩んでいなかった、救いの真理に向かっていなかった、神に向かっていなかったとしてもです。それでも私たちはパウロと同じように一時も一歩も譲歩してはならない、妥協してはならないということです。皆が、周りが。つつい私たちは長いものに巻かれようとするかもしれませんが。でも絶対に曲げてはいけません。たとえそれが、孤立を意味したとしてもです。たとえそれが、仲間外れを意味したとしてもです。たとえそれが、変な人というレッテルを貼られることを意味したとしてもです。たとえそれが、私たちとは違うからあなたたちは異端だ、カルトだと言われたとしてもです。人を恐れると罠に陥ります。人を意識すると失敗します。でも神を意識するならば、人を恐れる必要はありません。どんなプレッシャーがあろうと、あなたが神を意識するならばペテロと同じような過ちに陥ることはありません。パウロはガラテヤ 1:10 のところでは（『いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歡心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまお人の歡心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。』）私は人の歡心を買うために生きているのではない。人を喜ばせるために働いているのではないと。ミニストリーしているのではない、教会を運営しているのではない。むしろ神を喜ばせるために、いわば神の歡心を買うためにパウロは働いていたわけです。でもペテロは、人の歡心を買うために、人を喜ばせるために。ヤコブのところから来たと自称している割礼派の人たち、偽兄弟たち、かき回す者たち、影響力を持っている人たち、強い人たち。彼らに合わせようとしたわけです。彼らの歡心を買おうとしてしまったわけです。その結果パウロから非難されることになるわけです。『みなの前で』とあります。大変な恥です。個人的にはないのです。プライベートではなくて、皆の前で。多くの人がいるその前で、パウロはペテロを指差して糾弾したわけです。第一テモテ 5:20 にこう書いてあります。『¹⁹長老に対する訴えは(教会の指導者に対する訴えは)、ふたりか三人の証人がなければ、受理してはいけません。²⁰罪を犯している者をすべての人の前で責めなさい。ほかの人をも恐れさせるためです。』勿論 20 節で言っている「罪を犯している者」というのは、文脈上長老たちです。教会のリーダー、指導者です。牧師と言って良いと思いま

す。長老だとか、牧師、責任者、監督、教会のリーダー。彼らは所謂公人であります。その公人が公の場で罪を犯したならば、公の場で責められなければならないということです。厳しいですけれども、それが教会でなされることです。ですからヤコブも、多くの人が教師になってはならない、と言っています。なぜならば、教師は格別厳しい裁きを受けるからだ、と言っています。公人である牧師、教会のリーダーは、公の場で罪を犯せば公の場で断罪される。勿論その場で悔い改めればそれで良いわけです。そして、ペテロはそうしたわけです。厳しいですけれども、それだけ責任が重いということです。それだけ影響を与えてしまう立場にあるということです。ですからパウロはハッキリと使徒の頭であるペテロに対しても筋を通したわけです。

15 節、16 節。テキストに戻って下さい。『¹⁵私たちは、生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような罪人ではありません。(これは誤解しないで頂きたいのですけれども、“異邦人のような罪人ではありません”とありますがこれは意識で、直訳は“異邦人の罪人ではありません”と。異邦人の罪人ではないとは、どういうことかという、異邦人というのはユダヤ人と違って律法を持っていない人たち、神を知らない人たちという意味です。食物規定を破って豚肉を食べれば、それだけで罪人と言われるわけです。ですから異邦人は罪人ということです。そういう意味ですから別に差別をしているわけではありません。)』¹⁶しかし、人は律法の行ないによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行ないによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもないからです。』まさにこの**16 節**は、『キリスト教とは』という定義です。福音の大憲章というふうにも言えるところです。

ルターはこのガラテヤ人への手紙を受けて宗教改革を断行したと言いましたけれども、そのルターがこのガラテヤ 2 章の 16 節、17 節のところで、このようなコメントをしております。「これは福音の真理である。それはまたあらゆるキリスト教教理の主要な項目でもある。あらゆる敬虔な知識はその中に含まれている。であるから、我々がこの項目を十分に理解してそれを他人に教え、絶えず彼らの頭の中に叩き込むことは極めて必要なことである。」またこうも言っています。「本当のキリスト者を実際に作るのは、この教理だからである。もし 1 度義認という項目が失われるなら、真のキリスト教教理のすべてが失われる。」ですからこれが福音の生命線だとルターは言っているわけです。ガラテヤ人への手紙の主要聖句とも言えるところでもあります。人は律法の行ないによって救われるのではなくて、割礼を受けて救われるのではなくて、また洗礼を受けて救われるのではなくて、イエスを信じる信仰だけで救われる。残念ながらプロテスタントの中にも、もはや福音主義から外れて「洗礼を受けなければ救われない。」日本基督教団とかルーテル教会とかがそういうところ。そういうところにプロテストしたいと思えます。ルターがその現状を見たら猛烈に怒ると思えます。私の名前を使うなど。ルター派、ルーテルなんて使うなどと思えます。

そしてペテロは残念ながら妥協してしまって、そしてまるで行ないによって救われる行為義人の新しい宗教を作ってしまうかのような恐ろしい働きに加担してしまったわけであり。勿論そんなつもりは本人にはなかったと思いますが、ちょっとした罪、自己保身です。悪く思われたくない。良い人に思われたくない。変な人に思われたくない。仲間外れにされたくない。カルトだとか、異端だとか、そんなことを言われたくないから。その妥協がどれだけの負の影響をもたらしてしまうのか、知って頂きたいと思えます。実際には、誰でも律法の行ないによっては救われない。律法なんか土台守りきれないんだと。誰もが律法を守りきれないので、誰もが罪人である。これが事実であります。律法の行ないによって救われるなんていうのは幻想に過ぎない。そして罪人であることを認めることが出来る者だけが、義と認められるということです。**ローマ 4:5。**パウロの言葉です。『**何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。**』律法の行ないなんか、とても出来ない。豚肉大好きです。うなぎ大好きです。魚介類全般大好きです、という私は絶対に救われなかったと思えます。律法の行ないをとて守りきれなかったと思えます。ですから私たちも過ちを犯してはいけません。このような錯覚、幻想に陥ってはなりません。すなわち神からの好意、神の愛顧、神の引き立て、神の祝福。それを自らの努力によって勝ち取る、獲得出来るなんてことを思ってはならないということです。毎日毎日欠かさずディボーションをしているから、神様は私の祈り

に応えて下さるに違いない。毎週バイブルスタディーに参加しているから、礼拝に集っているから、日曜日礼拝を厳守しているから、だから神様は祝福してくれるに違いない。この祝福は私の努力のおかげである。暗誦聖句したから、証したから、伝道したから、献金したから、奉仕したから、だから神は祝福してくれる。大きな過ち、誤りであります。人間の犠牲だとか、努力だとか、苦行。そんなものによって神の好意、愛顧、引き立て、祝福を得られる、ましてや救われるなんていうことは絶対にあり得ないということです。イエス・キリストを信じるその信仰によってのみ私たちは救われます。それが神の恵みです。全くふさわしくない、何の働きもない、何の功績もない罪人に対して与えられるのが神の救い。むしろイエスを信じるその信仰を持っている者に対して神は恵みを施して下さいます。私たちをもっと恵みたい、もっと祝福したい。それが、神様が願っておられることです。何もしなくたって神様は良くしたいと願っているんです。神の祝福、これは私のすること、若しくはしないことをベースにして与えられるものではないということ。あれもしたかったから、だから神様は私によくして下さいに違いない、祈りに応えて下さるに違いない、祝福して下さいに違いない。そのようなベースに則^{のっと}っているわけではないということです。むしろ神様の成されたこと、それは具体的にイエス・キリストの十字架の贖い。これが私たちの祝福のベースとなっています。神様の祝福は、“私たちの”ではなくて、“キリストの”成されたことを基盤としてもたらされるものです。ですから祝福というものは、私たちの行ないとか全く関係ないということです。祝福を受け損なうことがあるとするならば、それはたった 1 つ。私たちが意識的に意図的に神に反逆して罪を犯すことを選ぶ時であります。勿論罪ですらイエス・キリストの十字架の血潮によってすべて赦され、すべて洗いよめられることは**第一ヨハネ 1:7,9** に約束されていることではあります。キリストの血潮によって私たちのすべての罪、どんな罪でも赦されますし、きよめられる。これは約束されています。でも、それでも分かっているながらも、なおも罪を犯すことを選ぶならば、残念ながら私たちは自分から神の祝福をカットすること、自らに呪いを招くことをしてしまうということです。一番分かりやすい事例は**民数記 22 章**に出てくるモアブの王バラクが雇ったバラムのやったことです。バラムはイスラエルを呪うようにモアブの王のバラクに雇われました。何度も何度も生贄を捧げて、そして神にイスラエルを呪って欲しいと。イスラエルはあんなにもいい加減な民、あんなにも頑なで、あんなにも不信仰に陥る、汚い、罪深い、情けない民。呪われるに値する民です。と言って、当然バラムからしたらイスラエルは神によって呪われるものだと思われていたんですけども、しかし神はご自身の民を呪うことをせず、むしろ相応しくないのに一方的に祝福されたわけです。何度も何度も同じことを試したんですが、それでも神はイスラエルを祝福することをされて、バラムは失敗したわけです。でも、バラムはあきらめませんでした。なぜならばモアブの王バラクが大金を用意していたからです。そのお金がどうしても欲しかったので、バラムは結局新たなプランを練ったわけです。それは、自分が何をしても結局イスラエルを呪うことは出来なかったもので、神はイスラエルを呪うことは絶対に為さらないことがもう分かっていたので、プランを変更して、モアブの王バラクに対して「あなたはモアブの中で最も美しい女性たちを選んで下さい。そして彼女たちを使ってイスラエルの男たちを誘惑して下さい。そして彼らがモアブの偶像の神と一緒に拝むように。(その偶像礼拝には性的不道德のいろんな秘儀、儀式がともなったわけです。)ですからそのようにしてたぶらかすならば、誘惑に陥らせるならば、イスラエルは自らに呪いを招くことがあります。イスラエルを呪うことは出来ませんが、イスラエル人が自らを呪うということは、これは出来ます。」と。そしてそれはバラクの目になかったので、バラクはその通りにバラムのアドバイス通りにしたわけです。そして実際にイスラエルの男たちは、モアブの女性たちの天幕の中に、テントの中に入って行ってしまったわけです。そして彼女たちの誘惑に陥って、結果 2 万 4,000 人もの人たちが自らに呪いを招いて滅ぼされたわけでありました。それと同じように神の祝福の源を私たちが自ら罪を犯すことを選ぶことによって塞いでしまう、妨げてしまう、受け損なうように凶ってしまうということがあり得るということです。ペテロも同じことをしたわけです。だんだんと譲歩して妥協することによってです。私たちもだんだんと。いきなりは妥協しないかもしれませんが。ちょっとずつ。このぐらいいは大丈夫かな。この程度のものならば、この程度の映画なら見て良いんじゃないか。この程度のドラマなら見て良いんじゃないか。この程度の音楽なら聞いて良いんじゃないか。たとえその中に性的な不道德な描写があったとしても、行為が映っていたとしても。たとえその中に神を呪うような、イエス・キリストの御名を辱めて傷つけるようなことが言われていたとして

も、非聖書的な反キリスト的なことはちょっとだけだけれども。でもそれはちょっとだけだから、このぐらいは良いんじゃないか。皆聞いているし、皆見ているし、流行っているし。ちょっとしたことからすべては始まります。そして、その結果自らに呪いを招くことになります。注意して頂きたいと思います。この世にはバラムのアドバイスが溢れています。モアブの女のテントに私たちも誘^{いざな}われているということを知って頂きたいと思います。

そして 17 節。『しかし、もし私たちが、キリストにあって義と認められることを求めながら、私たち自身も罪人であることがわかるのなら、キリストは罪の助成者なのでしょうか。そんなことは絶対にありえないことです。』異邦人と一緒に飯を食べたら罪人になってしまうのか？そんな事はあり得ない。だったらキリストはどうなるのか。キリストだって罪人たちと一緒にご飯を食べたじゃないか。罪人、取税人、遊女たちとイエスも一緒にご飯を食べたわけです。大酒飲みの大食漢という、そういうレッテルまで貼られたわけです。でもイエスは勿論罪人になったわけではありません。

イエスの言葉としてマルコの福音書 7:18~23。このように書いてありますから聞いて下さい。『¹⁸ イエスは言われた。「あなたがたまで、そんなにわからないのですか。外側から人にはいって来る物は人を汚すことができない、ということがわからないのですか。¹⁹ そのような物は、人の心には、はいらないで、腹にはいり、そして、かわやに出されてしまうのです。」イエスは、このように、すべての食物をきよいとされた。²⁰ また言われた。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。²¹ 内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、²² 姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、²³ これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。』何を食べるか、が問題ではない。外から取り込むものがむしろ悪いというよりも、あなたたちが何を言うか、何をやるか、どう生きるか、それが問題であると。だからといって何をしてもいいんだ、というわけではない。罪の赦しというのは、許可の許しを意味しません。恵みは、何でもやって良いという罪のライセンスではない、免許証ではないということです。恵みを濫用してはいけません。このことは、パウロはローマ人への手紙でも釘を刺しています。6章 1~2 節でこう言っています。『¹ それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。² 絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。』と。

そして、テキストに戻って頂いて、**ガラテヤ 2 章**です。ですから何でも出来る自由もありますけれども、だからといって何をしても良いわけではありません。する自由と、しない自由があるわけです。お酒を飲んでも構いません、酔っ払わないならば、泥酔しないならば。でも酒を飲まない自由もあるわけです。飲まなくたって良いわけです。飲む必要性すらないわけです。それと同じように私たちには常に「あれはしてはいけない、これはしてはいけない。」という律法主義に私たちを誘^{いざな}おうとする誘惑もあります。酒を飲んでいないからといって、飲んでる人を裁こうとする。そして飲んでいない自分がより霊的である、スピリチュアルである、敬虔なクリスチャンだと見なしてしまう。そういう愚かさです。そして一方で何でも出来る、どんな自由でもある、酒でもタバコでも何でも呑んでやると。そういう愚かな考えにも陥るわけです。そんなことをする必要もありませんし、実際のところそれらが私たちを中毒症・依存症に導くものでもあります。ですから私たちは自分の弱さを十二分に認識して、そして避けるべきものは避ける必要があります。キリストの栄光を現わすために、自分を喜ばせるのではなくてイエスを喜ばせるために、もっと高尚な生涯を送ることが出来るということです。

18 節。『けれども、もし私が前に打ちこわしたものをもう一度建てるなら、私は自分自身を違反者にしてしまうのです。』恵みによって救われたそのキリストにある自由、それを台無しにしてしまうのは行いです。恵みの反対は行い。その恵みについつい行いをプラスアルファしてしまう、ミックスしてしまう、何かを付け加えようとする。「信じるだけでは不十分。洗礼も受けなければいけない。割礼も受けなければいけない。あれもしなければいけない。これもしなければいけない。」規制だとか、規則だとか、ルール。そういったものを課そうとする、縛ろうとする。注意して頂きたいと思います。イエス・キリストは十字架の上で「完了した。」と宣言されました。「未完了」とは言っていないんです。ですからもう付け加えることは何もないということです。パウロにも付け加えることはない、エルサレムの主立った人たちがそう宣言したように、イエス・キリストの十字架の御業に、信じるだけで救われるという恵みの福音に、信仰義認

の教理に、私たちは何も付け加えてはならない。恵みに行いをミックスする、付け加える。絶対にあってはならないことです。私たちは罪人のままで救われたんです。ですから「あれをしなければ救われない。これをしなければ救われない。」それはあってはならないことです。魚を獲るのに、魚をきれいに洗ってから私たちは獲りません。魚は、魚をそのままとって、その後には洗うわけです。ですからクリスチャンも同じように、身をきよめてから、生活を正してから、もっと聖書を読んでから、勉強してから、それからイエスを信じますとか、それからクリスチャンになりますという事は、これは福音に反することです。

19 節。『しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。』パウロにとって律法はもはや重要事項でも何でもなくなったわけです。今までは律法がすべてだったんですけれども、今はパウロにとってキリストがすべてとなったわけです。ルターという人もパウロのように「もし誰でも修道生活によって救われるとすれば、その人物こそ私であった。」というふうに言っています。パウロも「もし律法によって救われるのであれば、その人物こそ私だった。」と言っているわけですが、ルターもパウロと同じだったわけです。ローマ・カトリックにおいて、ローマにある『聖なる階段』スカラ・サンクタというその階段を両手と膝だけで登るならば、そのことは苦行ですが、優れた功績と見なされて、それが救いにつながる、と教えられていたわけです。でもその苦行をしている間に天から声があったわけです。「義人は信仰によって生きる」と。これは勿論ハバクク書の言葉ですが、それをパウロも手紙の中で拡大して、教理化して、沢山説明を加えたわけですが、強調したわけですが、それをルターも主から啓示を受けて示されたわけです。そしてその瞬間にルターは「あれをしなければいけない。これもしなければいけない。」その律法主義から、その縛りから解放されて、キリストにある自由に与ったということを述べております。実際に律法主義の世界というのは、自分が罪人であるということを認めることは出来ません。罪人だということを認めようものならば、その時点で自分自身の存在を否定することになってしまうからであります。律法主義者の人たちは、一様に異口同音に「私たちは神のために生きています。神の栄光のために生きています。神中心に信仰生活を送っています。」と口では言いますが、実際には律法主義の人たちは自分中心に生きております。自分の努力だとか、自分の行いによって必死に誰かに認めてもらおうとしながら、実に自分の本当の姿、愚かで弱くて醜い罪深い、結局は律法を守り行なわることが出来ない、そういう姿を隠し通さなければ生きていけない世界。それが律法主義の世界であります。ですから彼らは必然的に仮面を被るんです。自分が出来る者だという仮面を被る。それが偽善者ということです。その仮面を被っているうちに、どんどん自分を失っていくわけです。それが律法主義の実情と言って良いと思います。結局律法主義というのは、自分をどんどん失っていく世界です。皮肉なことです。でも私たちがキリストに生きるならば、私たちは自分を否定します。自分を捨て、自分の十字架を負って、イエスに従います。律法主義は自分を否定して、そしてユダのように結局は自分で首をくくって、そして死んで消えてなくなってしまうわけです。でもペテロのように自分の罪を認めて、そしてイエスの前にひれ伏すならば、私たちも同じようにするならば、自分は消えます。でもキリストがその瞬間から生き始めるわけです。律法というものは、まさにそのようなものです。それに見切りをつけてパウロはすべてをもうちりあくと見なして、キリストへ走ったわけでありました。

20 節に『私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。』ここは時間をかけてじっくりと本当は分かち合いのところですが、今日は **21 節**まで、最後までやりたいので、そんなに沢山の時間はここに使いませんが、でもこれもまさに福音そのものです。福音というのは、ある時ある日天国に行けるということだけではなくて、今キリストが自分の内に住んでおられる、それがグッドニュースです。良い知らせです。生けるまことの神が、復活の主イエス・キリストが、自分の内に住んでおられる。それがグッドニュース、福音であります。「十字架につけられました。」という言葉が大事です。今十字架につける必要はもうないということです。過去にもう既に十字架につけられて、既に私たちはイエスと共に死んでいるということです。律法は、それを守ることが出来ないということを私たちに示してくれます。私たちがどんなに外れた者か、的外れな罪人かということを示してくれます。その結果、パウロは自分がどうしようもないダメ人間だということ

が分かったわけです。完全に律法によって潰された。律法によって殺されたわけです。でもそれが幸いだったわけです。神は死んだ者を使ってくれるわけです。イエスは死んだ者をよみがえらせて下さるわけです。イエスは私たちに来なかったことをすべてして下さいました。律法を廃棄するのではなくて、律法をすべて成就するためにイエスは来て、そしてその律法の成就者が私たちのうちに住んで下さる。そしてそのイエス・キリストが私たちを通して神の律法を行って下さる。外面的な律法を守り行なうのではなくて、内面的な神の律法、神の教え。それを私たちの肉体を通してイエス・キリストが行って下さる。イエス・キリストが私たちの口を通して語り、イエス・キリストが私たちの手足を使って神の御心を行って下さる。言わば神が私たちのうちに受肉しておられるということです。信じられないことですが、それが神の用意された救いであり、それが良い知らせ、福音であります。私たちには到底出来ないことを、神がすべてして下さったわけです。私たちはもはや自分の肉の命によって生きているのではなくて、キリストの命によって生かされている者に変えられたわけです。律法による自己中心から、信仰によるキリスト中心の生活へと私たちは変えられていった者です。かつてのパウロは、サウロと呼ばれていました。彼は律法主義者、パリサイ人でした。行為義認を誇りとしていた人物です。自分の行いによってサウロは生きようとしていたわけです。でも復活のキリストに出会って変えられたわけです。そしてパウロとなって、これからはキリストの行ない、すなわち恵みによって生かされる者。自分の行いによって生きるんじゃなくて、キリストの行ないによって生かされる者。神の恵みによって生きる者に変えられたわけです。

最後 21 節に『私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。』律法の行ないによって、割礼を受けることによって救われるなんていうのは、キリストの死を無意味にしてしまう。あってはならないこと。この点についてパウロは激怒したわけです。猛烈に抗議したわけです。偽教師たちに対してもそうですし、偽教師でないにしても偽教師と同じような過ちに陥った使徒の頭ペテロに対しても躊躇なく、顔色を見ることなく、妥協しないで、譲歩しないで、敢然と反対したわけです。抗議したわけです。プロテストしたわけであります。私たちはこの福音の真理にしっかりと立っているでしょうか。神の恵みの下にとどまっているでしょうか。恵みを無駄にしないで、今しっかりとキリストの自由を満喫しているでしょうか。それとも、また元の生活に戻って「あれをしなければいけない。これもしなければいけない。あれをしてはいけない。これもしてはいけない。」律法主義、禁欲主義、「こうすれば神の祝福・好意・愛顧に与る。引き立てを受けることが出来る。祝福を受けることが出来る。」あってはならないことです。福音の根本、原点がこの 2 章の中でも確認されました。私たちはイエスと共に死んだ者です。犯罪者も、死刑を宣告された者でも、獄中で死んでしまえば、もう法廷に立つ事はないわけです。つまり、死んでしまえば裁かれることはないのです。私たちもイエスと共に死んだ者だとパウロはローマ 7 章で言っております。律法に対して私たちは死んだ者。しかし再び律法に対して生きようとするならば、行為義人に向かおうとするならば、キリストの死が無駄になる。恵みが台無しになるということをパウロは最後言っております。もう一度パウロの勇気に対して私は主に感謝したいと思います。妥協しなかった、譲歩しなかった、人にどう思われようと、馬鹿にされようと、罵られようと、何と言われようと譲歩しなかったそのパウロの行動に対して、主に感謝をしたいと思いません。私たちの内にもペテロの傾向が見られます。残念なことですが、私の内にも見られるということ認めざるを得ません。でも、ペテロも悔い改めました。そしてパウロとはちゃんと和解をしております。その証拠にペテロの書いた手紙第一第二の中では、ペテロはパウロのことを尊敬して、パウロの手紙も神の言葉の権威を与えて認めるように、受け入れるようにという勧めもしております。そしてペテロの手紙のすべての章に、『恵み』という言葉がペテロは使っています。第一ペテロ 5:12 のところには、ペテロは『真の恵み』という言葉も使っています。恵みを偽りの恵みに変えてしまった、行いをミックスした恵みに変えてしまったペテロの失敗が、そこに示唆されています。『真の恵み』混ぜ物のない恵み、真の福音、ねじ曲げられていない福音の真理。それが『真の恵み』です。信じるだけでは不十分、と感じてしまう私たちです。「何かそれだけでは物足りない。なぜならば簡単すぎる。何かしなければ救われているという実感が湧かない。何かしなければ神様から祝福されるとは思えない。努力しなければ、頑張らなければ、犠牲を払わなければ、痛い思いをしなければ、辛い思いをしなければ、神様は私の祈りに答えて下さらない。

お百度参りするようになって祈らなきゃダメ。」それが私たちの傾向にあります。信仰プラスアルファ、恵みプラスアルファ。そういうことが、多くの人たちの中に抱いてしまう間違い、過ちであります。十字架が不完全なんて、絶対にあり得ないことです。キリストを無駄死にさせてはいけません。勿論無駄死になんかしませんけれども、犬死とみなすような恐ろしいことをしてはいけないということです。私たちの立っている福音とは、キリストの命がかかったものだとすることを忘れてはいけません。タダで受けたものは、キリストの命の代価が支払われているということを忘れてはいけません。その上で今一度この神の恵みに浴して、しっかりとこの恵みにどっぷりと浸かって、そしてキリストにある自由を今は満喫して欲しいと思います。あなたは何もしなくても良いのです。ただ信じるだけで救われます。恵みによって信仰を通して私たちは救われたのですから、なおも恵みによって救われ続けようではありませんか。そして、信仰だけでいいと。イエスを信じるだけで、それで充分。完了されたキリストの働き、それに信頼するだけで充分です。神様はあなたを祝福したいと願っています。何の働きもない、役に立たないと自分で思っているかもしれません。「むしろ私なんか教会では足手まとい。私なんかは、たいして役に立たないどころか、むしろ居ない方が良いかもしれない。私のような弱い者は、トラブルメーカーは。」と、あなたは思っているかもしれませんが、とんでもありません。神様はあなたのような者を祝福したいと願っています。ハッキリ言っておきますけれども、役に立つか立たないか、そういうレベルじゃないんです。私たちはイエス・キリストを十字架に磔にした極悪人なんです。ですから「私のような者はまだまだ。」なんて思っている人は、とんでもない考え違いをしています。「もうちょっと聖書を読んでから。もうちょっと訓練を受けてから。もうちょっと勉強してから。そうしたら私は。」なんて思っている人は、完全に自分を買い被っている人、自己過信に陥っている人、もうプライドの塊であります。私たちはそんな者ではありません。何の努力も出来ない。それすら許されない。地獄に落ちるのが相当だった者だったわけですが、そういう私たちが恵みによって一方的に救われた。そしてそういう者が神の栄光のために用いてもらえる。あり得ない、信じられないような特権が私たちに与えられているだけだということです。それを感謝して、それを素直に受けて、そして神に使って頂く。こんな私でも使っていただけるならば、喜んで私はあなたに私自身を差し出します。「あれをしなければいけない。これをしなければいけない。」ではなくて、「させて下さい。」と。そして「あまりの素晴らしい驚くべき恵みに少しでも私は応えたい。応答したいのです。やらせて下さい。やりたいのです。」やらなきゃいけない、のではなくて、もうやらざるを得ないほど恵みが迫ってくるのです。「こんなにも愛されているのに、黙っていられません。こんなにも素晴らしい祝福に与っているのに、ただ黙って、ただ座って、何もしないで、そんな事は私にはとても出来ません。やらなきゃいけない、のではなくて、やりたいのです。やらせて下さい。」と応えていく。それが福音に基づく生き方。それが真のクリスチャンの恵みによる人生というものであります。

そのことをもう一度覚えて **3章**、また続きがございますので、恵みによって救われた者が再び行いに^{はし}奔らないように、誘惑に負けないように、騙されないように、行ったり来たりということがないように、アップダウンというものがないように、パウロはまた **3章**から続きを書いております。では、今日はこれで終わりたいと思います。